

幼稚園における運動遊び環境が 幼児の運動有能感の発達に与える影響

The Effects of Environment of Physical Play in Kindergarten on the
Developmental Perceived Physical Competence of in Preschool Children

岡澤 哲子

Tetsuko Okazawa

はじめに

人はもともと環境に働きかけて、よりよい相互作用ができるようになりたいと欲求する存在である。そのような有能さの感覚は有能感といわれ(White,1959)、身体的側面での有能感が運動有能感である。幼稚園には人も物も含めて様々な運動遊び環境を構成し、幼児のあふれんばかりの運動欲求を満たすことができる場である。そのような場で、教師は幼児が意欲的に運動遊びに挑戦するように育ててほしいと願っている。子ども達の意欲を引き出すためにはどのような保育環境がよいのかを教師は実践的に探求し続けている。

平成20年3月告示の幼稚園教育要領(2008)では、領域「健康」の中で自己の存在感や充実感を基盤に、心と体のしなやかな発達や自ら体を動かそうとする意欲の育ちを新たに内容の取扱いに示した。自己の存在感や充実感というのは、肯定的な自己概念であり、それは行動傾向の核心部分を占めるといわれている。幼児期の身体運動的自己概念は、自分は～ができるとか～が楽しめるといった運動有能感が中核となる(杉原、2000)。しかし、運動そのものが機械的に直接自己概念に影響を及ぼすのではない。友達や先生とともに運動遊びに親しんだり挑戦したりする中で、肯定的な成功経験や達成感を積みながら、様々な運動遊び遊びに内在している独自の楽しさや面白さをますます感じたいと思う内発的動機づけが満足されると運動有能感は形成されていくのである(杉原、2003)。

森ら(2010)は、2008年の全国調査からみた幼児の運動能力は、1986年から1997年にかけての低下以後は、低下した状態のままで推移し、現在に至っていると述べている。幼稚園や保育所の5歳児を対象に平成22年度に奈良県で実施された幼児の運動能力・生活習慣等調査(2011)では、十分に活発に多くの友達と運動遊びをする幼児の方が運動好きの子どもは運動能力が高いという結果が得られ、幼稚園や保育所での子どもの状況と運動能力に有意な関係が認められている。全国的には幼児の運動能力は停滞しているが、幼稚園や保育園での幼児の運動遊びの経験の違いによって運動能力は高められるのである。運動能力がこのまま低下することは避けなければいけないことであるが、運動能力を高める手段としての運動遊びは幼児の内発的動機づけを満足させない。運動能力とは運動好きになり多様な遊び経験をした学習の結果であることから、その過程における保育環境との相互作用から生まれる運動有能感の形成過程が重要である。

幼児の運動有能感を高める運動遊び指導として、杉原ら(2000)は、①子どもが運動したくなるような人的環境、②多様な運動を引き出す環境、③上手下手勝ち負けを強調しない、④子ど

もの考えを尊重する、⑤遊びのモデルを提供する、これらが重要であるとしている。そして、指導法とともに、毎日の環境構成だけではない年間を通した長いスパンの環境構成が必要である。幼稚園での比較的長い期間の運動遊び指導法や保育環境に関する先行研究として、幼児の主体性や遊びの総合的側面等を運動遊び指導の基本にした研究（杉原ら、2004）、肯定的で過程的な教師の言語活動が必要であるとした研究（岡澤、2005）がある。しかし、それらは年間を通した長いスパンの保育環境が運動有能感の形成に及ぼす影響を検討しているが、運動有能感の高まりの結果として見えてくる行動としての運動能力をも含めては検討されていない。また幼稚園における運動遊び場面に限定した幼児の運動有能感は「運動の受容感」と「運動の有能感」の2因子から構成されているので（岡澤、1996）、運動有能感の全体の変化としてみるだけではなく、運動有能感の詳細な変化を幼児の姿と照らし合わせ、教師が幼児の育ちを見逃さず見取り援助していく実践的な検討も必要である。

そこで本研究は、幼児一人一人の育ちを継続的に記録した教師の保育観察記録を手掛かりに、内発的動機づけを高める運動遊びを取り入れた年間の取り組み内容および運動場面の環境の工夫が、幼児の運動有能感を高め、運動能力向上にもつながっていったのかどうかを検証することを目的とする。

方 法

1. 時期

平成23年4月～平成24年3月

2. 対象

S幼稚園（N県K市立幼稚園）の年長児クラス22名（男児14名・女児8名）およびそのクラスの担任教師（職歴7年目）

3. 運動有能感測定

岡澤（1996）の「幼稚園の運動遊び場面における有能感テスト」を用い、平成23年6月28日（1回目）と平成24年2月20日（2回目）の保育時間中に職員室において実施した。調査者はこの調査方法に熟練している大学研究者（筆者）であった。このテストは、第1因子として教師や友達から受け入れられているという「運動の受容感」、第2因子として運動遊びができるという自己評価にかかわる「運動の有能感」の2因子から成る。本研究では便宜上「運動の受容感」を「受容感」、「運動の有能感」を「有能感」と表記する。テストは、個別面接で行われ、調査者が示す絵カードに対する質問に、幼児が絵カードへの指差しによって回答するものである。

4. 運動能力測定

幼児の運動能力全国調査（森ら、2010）で使用した運動能力検査の中から、4種目（25m走・テニスボール投げ・立ち幅跳び・両足連続跳び越し）を測定した。測定者は、N県主催の測定方法のDVD講習を受けた対象園の教師であった。

5. 保育観察記録

保育終了後、担任教師が1日5名の幼児の保育観察記録をとった。書く直前に5名の幼児の名前

がわかるよう、主任教師が直前に用紙を渡すようにした。また、5名の順番は乱数表によって決められた。これは、教師がどの幼児にもしっかりと目を向けていくことを目的に計画された。保育観察記録は「印象に残ったこと」「運動遊びの様子」の2点に対する自由記述であった。

6. 保育実践の内容

表1は、運動遊びの年間の取り組みの記録を示したものである。「わくわくタイム」の時間では、運動を自然な環境の中で取り入れて行こうと教師間で話し合い、毎日の好きな遊びの時間や毎日の運動遊びが魅力的になるような環境を幼児とともに園庭に設定した。

表1 運動遊びに関わる保育実践の内容

日付	取り組み	内容
4月～毎朝 (雨天はなし)	わくわくタイム	<ul style="list-style-type: none"> ・年長・年少が固定の仲良しペアを組み、全体が2グループに分かれて、体操・園庭を走るなど ・終わりの体操には必ず一人リーダーが立ち、自分で考えた体操をみんなに教える ・鉄棒にぶら下がる、登り棒に登る、ダッシュ、巧技台を渡る、フープのケンパ跳びなど
6月6日	設定保育での保育のビデオ撮影	教師の言葉等を互いに聞きあい、いいところ探しをする
6月7日	運動能力測定(1回目)	保護者が手伝いで参加・年少も測定する
6月12日	日曜参観「親子で遊ぼう」	園外講師(筆者)が親子の運動遊びを指導
6月15日	第1回チャレンジサーキット	<ul style="list-style-type: none"> ・隣接する小学校の5年生と園児が固定ペアになり、鉄棒にぶら下がる・ダッシュ・渡る・跳ぶ・投げるなどの場に行き、グループで行い、3分間ごとに場を移動する ・5年生が園児の今日の目当てと様子を記録する
6月27日 ～11月8日	保育観察記録をとる	<ul style="list-style-type: none"> ・1日5名の幼児の観察記録をとる ・一人一人の園児を受容的によく見るようになる効果をねらう(方法のところで詳細説明)
6月28日	運動有能感テスト(1回目)	園外講師(筆者)が測定を手伝う
10月1日	運動会	小学校と合同でおこなう
10月27日	第2回チャレンジサーキット	第1回と同様
10月28日	第3回チャレンジサーキット	第1回と同様
11月1日	園長先生と遊ぼうタイム	年少(ボール遊びダッシュでゴー)
11月2日	園長先生と遊ぼうタイム	年長(ボール遊び・整列・ダッシュでゴー)
11月24日	第4回チャレンジサーキット	第1回と同様
12月5日	園長先生と遊ぼうタイム	年長(ダッシュでゴー、リレー)
12月5日	運動能力測定(2回目)	園外講師も加わり測定・年少も測定
2月20日	園長先生と遊ぼうタイム	年長・年少(縄跳び:持ち方、回し方、跳び方)
2月20日	運動有能感テスト	園外講師(筆者)が測定
3月9日	第5回チャレンジサーキット	第1回と同様
その他	他園との交流	フレンドシップ遠足・園対抗リレー

結 果

1. 運動有能感

Harter(1978)は、幼児の運動有能感は加齢ともなって低下する傾向があると述べている。そこで、月齢から予測される得点の回帰方程式を求め、その式から割り出される予測値と測定値

の差を指標とした。回帰方程式は以下のとおりである。

$$\text{受容感} \quad y = -0.178991 * \text{Age} + 28.148064$$

$$\text{有能感} \quad y = -0.11425 * \text{Age} + 25.937487$$

$$\text{運動有能感} \quad y = -0.321491 * \text{Age} + 54.085551$$

表2は運動有能感の1回目と2回目の平均および標準偏差を示したものである。t検定の結果、6月と2月の受容感の平均の差は有意であった（ $t(21) = -2.475$ 、 $p < .05$ ）。したがって、6月より2月のほうが高いといえる。

表2 運動有能感の変化

		6月	2月	t
受 容 感	平均	2.23	3.30	-2.475*
	n	22	22	
	S D	1.80	1.61	
有 能 感	平均	2.43	2.78	-.766
	n	22	22	
	S D	1.41	2.41	
運動有能感	平均	4.72	6.15	-2.050
	n	22	22	
	S D	2.95	3.41	

2. 運動能力測定

表3は測定記録の1回目と2回目の平均および標準偏差を示したものである。t検定の結果、6月と12月の25m走の記録の平均の差は有意であった（ $t(21) = 7.769$ 、 $p < .000$ ）。また、6月と12月の両足連続跳び越しの記録の平均は有意であった（ $t(21) = 2.404$ 、 $p < .05$ ）。したがって、25m走と両足連続跳び越しの記録は6月より12月のほうが優れているといえる。

表3 運動能力記録の変化

		6月	12月	t
25m 走 記 録	平均	6.80	6.14	7.769***
	n	22	22	
	S D	.561	.651	
テニスボール投げ記録	平均	6.1	6.8	-1.700
	n	22	22	
	S D	2.26	2.62	
立 ち 幅 跳 び 記 録	平均	83.59	87.18	-1.224
	n	22	22	
	S D	14.99	10.52	
両足連続跳び越し記録	平均	5.49	5.11	2.404*
	n	20	20	
	S D	.73	.57	

表4は、測定記録を基に測定時の月齢から、森ら（2010）の運動能力判定基準表にしたがって算出した4種目の評定値（各種目1～5）とそれらの合計である運動能力評定値（4～20）の平均と標準偏差を示したものである。t検定の結果、6月と12月の25m走の評定値の平均の差は有意であった（ $t(21) = -4.822$ 、 $p < .000$ ）。したがって、6月より12月のほうが25m走の評定値は高くなったといえる。6月と12月の立ち幅跳びの評定値の平均の差は有意であったが（ $t(21)$

=2.409、 $p < .000$)、6月より12月のほうが立ち幅跳びの評定値は低くなったといえる。

表4 運動能力評定値の変化

		6月	12月	t
運動能力評定値	平均	10.91	9.86	1.750
	n	22	22	
	S D	2.51	3.87	
25m走評定値	平均	2.68	3.45	-4.822***
	n	22	22	
	S D	.89	.96	
テニスボール投げ評定値	平均	3.00	2.55	1.689
	n	22	22	
	S D	.98	1.01	
立ち幅跳び評定値	平均	2.18	1.77	2.409*
	n	22	22	
	S D	.85	.53	
両足連続跳び越し	平均	3.05	2.73	1.233
	n	22	22	
	S D	.79	1.08	

3. 運動有能感の個々の変化

個人別運動有能感の記録と2月の数値から6月の数値を引いた変化量を表5に示した。

表5 運動有能感の個人別変化

	受 容 感		有 能 感		運動有能感 (合計)		受 容 感 変化量	有 能 感 変化量	運 動 有 能 感 変化量
	6月	2月	6月	2月	6月	2月			
A児	1.244	3.312	1.151	3.003	2.459	6.385	2.068	1.852	3.926
B児	3.778	4.846	3.577	4.429	7.422	9.348	1.068	0.852	1.926
C児	-1.4	2.668	-1.565	-3.713	-2.899	-0.973	4.068	-2.148	1.926
D児	0.49	1.558	2.145	-1.003	2.706	0.632	1.068	-3.148	-2.074
E児	2.846	4.914	2.429	5.281	5.348	10.274	2.068	2.852	4.926
F児	4.312	2.38	4.003	4.855	8.385	7.311	-1.932	0.852	-1.074
G児	3.778	-0.154	3.577	1.429	7.422	1.348	-3.932	-2.148	-6.074
H児	3.956	5.024	0.719	3.571	4.743	8.669	1.068	2.852	3.926
I児	1.6	4.668	2.435	4.287	4.101	9.027	3.068	1.852	4.926
J児	1.956	0.024	0.719	1.571	2.743	1.669	-1.932	0.852	-1.074
K児	-0.578	4.49	2.293	4.145	1.78	8.706	5.068	1.852	6.926
L児	3.422	4.49	3.293	4.145	6.78	8.706	1.068	0.852	1.926
M児	0.312	1.38	2.003	1.855	2.385	3.311	1.068	-0.148	0.926
N児	3.066	4.134	3.009	-2.139	6.138	2.064	1.068	-5.148	-4.074
O児	3.778	4.846	3.577	4.429	7.422	9.348	1.068	0.852	1.926
P児	3.956	3.024	3.719	4.571	7.743	7.669	-0.932	0.852	-0.074
Q児	3.6	3.668	3.435	2.287	7.101	6.027	0.068	-1.148	-1.074
R児	4.134	5.202	3.861	4.713	8.064	9.99	1.068	0.852	1.926
S児	1.066	4.134	1.009	3.861	2.138	8.064	3.068	2.852	5.926
T児	3.6	3.668	3.435	4.287	7.101	8.027	0.068	0.852	0.926
U児	0.6	2.668	3.435	1.287	4.101	4.027	2.068	-2.148	-0.074
V児	-0.51	1.558	1.145	3.997	0.706	5.632	2.068	2.852	4.926

4. 保育観察記録と運動有能感

保育観察記録の結果は、表5の運動有能感の変化量から見て変化に特徴のある幼児のみの記録を記載した。図1および図2では、表6で取り上げた幼児の運動有能感の変化を示した。

表6 受容感の変化に特徴のある幼児の保育観察記録

変化量に特徴のある幼児	月日	曜日	天候		印象に残ったこと・運動遊びの様子
受容感の変化量がプラス方向に最も大きかった幼児	6・27	月	晴れ		給食当番の時に「〇〇ちゃんがない!」といって、職員室まで迎えにいったあげの面倒見のいい子だと思った。
	6・28	火	晴れ		朝から暑さのためか折り紙で遊ぶ。「先生あげる!」といって作ったものを持ってきてくれる。 「先生私も前でトントコをたたきたかった!」
				運動	掃除の後一輪車で遊ぶ。「少し手を離せるようになった!」といって喜ぶ。何度も繰り返して遊ぶ。
	7・7	木	雨		お母さんが園に来ると離れるときになくことが続いていたので、今日もなくてはなにかと思っていたが、不安になることもなく、いつもと同じように活動でき離れられた。
	9・1	木	曇り		〇〇・〇〇〇・〇〇・〇〇・〇〇と一緒に粘土でお母さんごっこをする。
	9・7	水	晴れ		給食の時、進んで机を準備し、机を拭いてくれた。
	9・8	木	晴れ	運動	しっぽりをして遊ぶ。気温が高いため新しいルール(休憩場所)をつくり、休みながら楽しむ。
	9・28	水	晴れ		あまり練習できなかった代表(運動会)の言葉も〇〇〇君と一緒に大きな声で言っていたように思う。
	10・11	火	曇り		朝登園してきた時に表情が曇っていた。家でおなか痛いって言ったのに・・・とつぶやいていた。園ではすぐに元気にもどり、リレーや縄跳びをして遊ぶ。縄跳びは走って入れるようになったことを喜び、一人でやってみたがる。
				運動	好きな遊びのときにリレーに参加する。また給食後の〇〇〇組が先にはじめているのを見て「リレーにはいってこよう」と参加する。
	10・13	木	曇り		1・2年生と一緒にいったあき探では、おおぜいの子が虫を見つける中、草花・紅葉した葉を見つけて帰ってくる。〇〇〇ちゃんと一緒にカップにアレンジして入れる。
10・18	火	晴れ		友だちが耳のそばで大きな声をだしたとって教師に伝えに来る。その友だちが謝りにいくと耳をふさいで聞こうとしなかった。話し合いをすると、自分がしてしまったことを振り返りることができたようす。	
			運動	わくわくタイムで鉄棒にぶら下がるときに、足首がうまく引っかけられなかった様子。でも15秒間に何度も挑戦していた。「おさるならぶら下がる」	
10・19	水	晴れ		給食を全品減らしてほしいといってもってくる。体調が悪いのかと様子を見ていたが全部食べられたことを喜び元気な様子で午後からも外で遊ぶ。	
			運動	わくわくタイムのとき〇〇〇幼稚園の友だちをしっかりと誘ってあげながら太鼓橋に20秒ぶらさがる。昨日はブタの丸焼きは鉄棒で挑戦していなかったが、今日は挑戦。	
11・8	火	晴れ		無記入	
受容感の変化量がマイナス方向に最も大きかった幼児	7・7	木	雨		わくわくパーティーがあるので、好きな遊びをする時間が短かったが、手紙を書いてあそぶ。その手紙を私にプレゼントしてくれた。マルモのおきてのダンスを大変気に入ったようで、給食後も「音楽かけてほしい!」といって友達と踊りを楽しむ。
	7・12	火	晴れ		「ごめんっていつているやる!」「もういいわ」といって〇〇ちゃん〇〇ちゃん3人で隅に座る。話を聞くと〇〇〇ちゃんと遊ばないと言ってしまったので、あやまったようであるが、言い方がきついといって〇〇〇ちゃんに怒る。2年生が遊びに来ていたので「どうする?こんな時?」とみんな話合う。〇〇〇ちゃんもあやまるだけでなくその前の段階でどうすればよかったのかを一緒に考えて仲直りすることができた。
	9・1	木	曇り		夏休みに「渦潮を見に行ってきた!」と進んで話をしに来てくれる。好きな遊びの時間に粘土を使って団子づくりをする。「つま楊枝ほしい!」と刺して遊ぶ。
	9・20	火	曇りのち雨		「かばんをいすの下に置きや」「タオル忘れてるで」と帰りの用意のときにたくさんの友だちに声をかけてくれていた。
	9・3	金	曇りのち雨		〇〇〇ちゃんへのお誕生日メダルをつくってくれる。また渡すのをたのしみにして「いつわたすの?」と聞いてくる。
	10・13	木	曇り		世界中の子ども達がの歌詞をよく覚えていている。声も大きく出しているので、〇〇〇ちゃんのかえがとでもよく聞こえてくる。
				運動	朝の用意を終えてすぐ、「先生!おおなわまわしたい!」といって誘ってくる。「先生が来てくれるまで一人で跳んでるわ」と一人の縄跳びに挑戦(前とび)。
10・27	木	晴れ		昨日の遊び、ほんぼりづくりをする。「教えてほしい」という友達にも「こうやってまくねん」とやってみせてあげていた。	

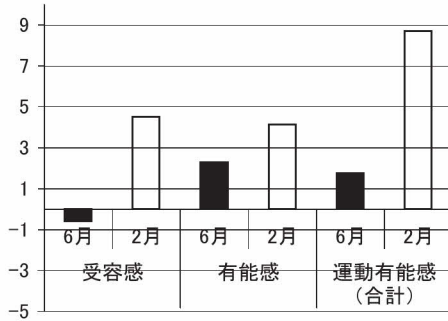


図1 K児の運動有能感の変化

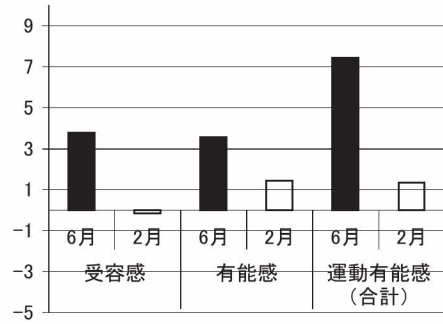


図2 G児の運動有能感の変化

図3および図4では、表7で取り上げた幼児の運動有能感の変化を示した。

表7 有能感の変化に特徴のある幼児の保育観察記録

変化量に特徴のある幼児	月日	曜日	天候	印象に残ったこと・運動遊びの様子
有能感の変化量がプラス方向に最も大きかった幼児 V児	6・30	木	晴れ	〇〇ちゃんとふたりで、ランチタイムの後に片付けをせずに食べている友達に声をかけたり、走ったりうろろしていたが、机をみつめてふたりで運んでくれたいた。
	7・6	水	晴れ	七夕飾りのお願いごとのうらに好きな絵を描いていたが、細かく描き、給食の後にも「まだ描く！」とやって仕上げる。 運動 マルモのおきての音楽に合わせてなんども〇〇ちゃんと一緒に楽しむ。
	9・29	木	晴れ	入場行進の練習のとき間をしっかりと取ろうとする姿があった。また〇〇ちゃんにもこえをかえてあげていた。 運動 一輪車に朝から乗る。
	10・11	火	曇り	和太鼓が好きなのか、自信がある表情でたたく。また手の振り方も正しくたたけていた。 運動 好きな遊びのときにリレーに参加する。なんども繰り返して遊ぶ。
	7・4	月	晴れ	和太鼓の時、2つのグループにつられ座らない席に座ってしまったり、見ておくときにもたたいてしまったりしていた。少し周りの様子や雰囲気かわかったのか、〇〇〇〇君や〇〇〇〇君に「座りや」と声をかける場面もあった。 運動 キッズサッカーでは話を聞かず、行動に移せないで、ルールを守れずにおにごっこをする。(足でけてといわれているが手でもって運ぶ)
最も有能感の変化がマイナス方向に大きかった幼児 N児	7・5	火	晴れ	昨日は 和太鼓の時に話を聞かず、グループと違うことをしてしまっていたが、今日は周りの子を見たりしながら動いていた。
	9・8	木	晴れ	しっかりと目を見て話を聞こうとする姿が見られた。ブロックを出してきて〇〇〇君と遊ぶ。
	9・27	火	晴れ	運動 行進練習で大きく手を振ってあるくようになった。
	9・28	水	晴れ	人に見られたりすると照れていた〇〇君が、最後までがんばって予行練習をしていた。 〇〇〇〇〇〇君と一緒にバランス積み木で遊ぶ。写真に載っている積み木の積み方をまねて遊ぶ。
	10・6	木	晴れ	運動 みんなでリレーをする(クラスの活動)。

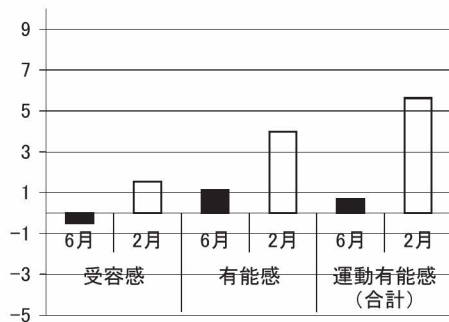


図3 V児の運動有能感の変化

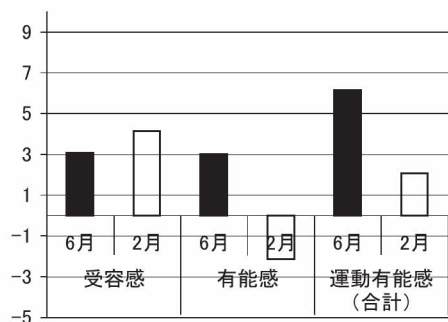


図4 N児の運動有能感の変化

表 8 は表 6 および表 7 で取り上げた幼児の運動能力測定記録を示した。

表 8 運動能力測定記録の変化

保育観察記録で取り上げた幼児の 運動有能感の変化の特徴		25m走 (秒)		テニスボール 投げ(m)		立ち幅跳び (m)		両足連続 跳び越し(秒)	
		6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月
受容感の変化量がプラス方向に 最も大きかった幼児	K児	6.4	5.7	5	4.5	92	93	6.6	4.9
受容感の変化量がマイナス方向 に最も大きかった幼児	G児	7.2	6.7	6	4	98	105	5.0	4.4
有能感の変化量がプラス方向に 最も大きかった幼児	V児	7.0	6	4	6	96	82	5.9	4.8
有能感の変化量がマイナス方向 に最も大きかった幼児	N児	6.6	6	8	7	106	92	5.2	4.6

考 察

1. 運動有能感の変化と運動能力の変化

運動有能感の変化については、月齢から予測される運動有能感得点の予測値と測定値の差を指標にした場合、6月よりも2月の方の受容感が高まっていることが明らかとなった。S幼稚園年長組は1クラスしかなく、22名で構成されている。年少組も1クラスで園全体が家庭的な雰囲気の中で、だれもが自分を知っていて受け入れてくれる雰囲気づくりをしている。表1の1行目のわくわくタイムや朝の体操などでは、1年間継続して年長と年少の固定したペアを組んで運動遊びに取り組んでいる。このペアは、運動遊びに限定されていない。これらの継続的な保育環境が、幼児の有能感を高めたひとつの要因と考えられる。

運動能力測定の変化については、4種目のうち25m走の記録と両足連続跳び越しの記録が6月よりも12月の方が高くなっていることが明確となった。運動能力評定値は、25m走のみが6月より12月の方が高くなっていることが明確になった。25m走は走る速度を測定するのであるが、できるだけ速く大きく手足を動かして、1本のライン横をまっすぐに走る運動コントロール能力が必要である。この種目の伸びが見られたことは、「走ること」という運動遊びで最も出現しやすい運動において多くの経験を積んだことによるものであると推測される。年少児も年長児を見学し応援した後、測定した。そして保護者のお手伝いもあり、測定時には年長児の挑戦しようとする気持ちも高まったと考えられる。

2. 運動に関わる保育実践での工夫と内発的動機づけ

先述したとおり、杉原ら（2000）が挙げている次の5点の内発的動機づけを高める運動指導の方法をポイントに考察を進める。

- ① 子どもが運動したくなるような人的環境
- ② 多様な運動を引き出す環境
- ③ 上手下手勝ち負けを強調しない
- ④ 子どもの考えを尊重する
- ⑤ 遊びのモデルを提供する

表1の保育実践の記録から、S幼稚園の保育実践を①～⑤の視点からみて、内発的動機づけが高まり運動有能感が高まった要因であるかを考察する。①の視点では、教師が自分の保育のビデオを見て言葉がけのいいところを探そうとして他の教師とともに取り組んでいることが大きく上げられるであろう。また、園長の専門が体育であったことから「園長先生と遊ぼうタイム」とネーミングして運動遊びを実施した。日頃の先生とは違う先生に教えてもらうことで運動したくなるような魅力のある時間であったと考えられる。また、隣接する小学校の5年生とのペアでの遊びは年間5回行われた。子どもにとって小学生は憧れであり、いつも同じおにいちゃんやおねえちゃんと運動遊びができることは安心して遊べる楽しい時間であったと思う。園外からの講師を招いての親子の運動遊びも運動がしたくなるような人的環境構成である。②の視点では、毎日のわくわくタイムにおける園庭での運動遊び環境づくりを継続したことがあげられる。また、チャレンジサーキットの後に、5年生が幼児の様子を記録することで、次の運動遊びをどのように構成すればいいのかというめあてやその幼児の育ちを見据えた取り組みであったと考えられる。③の視点では、特に上手下手や勝ち負け協調するプログラムはなかった。④の視点では、わくわくサーキットの終わりの体操の時のリーダー役に毎日誰かが立つことが象徴的な取り組みとして挙げられる。大きな輪の中心で、自分で考えた体操をみんなが真似してくれるという経験は、幼児の自信として積み上げられていく豊かな経験であると考えられる。⑤の視点では、①で述べた人的環境が遊びのモデルとして挙げられる。担任教師、園長先生、小学校5年生のお姉ちゃんやお兄ちゃん、保護者、園外講師である。幼児の遊びはまず真似から始まり、遊び込んでいくにしたがって創造性が引き出されていくものである。そういった意味ではモデルとなる様々な人的環境とのかかわりをもった保育であったと考えられる。また、保育者が、個々の記録をとっていくことで、どの子にも目を向けることへの意識が強くなり、記録の仕方を学ぶことだけでなく教師自身の子どもへのかかわり方・見方・声かけなどの学びにもなったのではないか。そのような教師の努力が、日々の生活の中で、運動に興味関心がなく自分自身に自信のない子の運動意欲を引き出し、子ども達の運動有能感や運動能力が高まったと考えられる。

3. 保育記録と運動有能感、運動能力から見た幼児の姿

1) 受容感の変化から

(1) K児について

保育記録では、いろいろな運動遊びに「何度も繰り返して」「一人でやってみたがる」「何度も挑戦」「今日は挑戦」という記録があり、K児のチャレンジする気持ちを教師が読み取っていることがわかる。しっかりと教師に見守られていることを感じていたことが受容感の向上につながったと考えられる。また、何度でも挑戦したことが、実際の運動能力の伸びにも表れている。

(2) G児について

保育記録に運動遊びに関する記述が少なく、どちらかといえば好きな遊びの時に運動遊びをする機会が少ない幼児ではないかと推測される。運動遊びの機会が少なければ、運動場面での受容感が高まりにくいであろう。運動能力は伸びているのであるから、好きな遊びの時に運動遊びを進んで選べるようになれば運動有能感も高まり、さらに運動能力も高まる可能性がある。

2) 有能感の変化から

(1) V児について

保育記録には運動遊びに「なんども…楽しむ」「朝から乗る」「好きな遊びの時に…何度も繰り返して遊ぶ」という記述がある。挑戦したことがうまくいった達成感についても教師が気づいており、運動能力も高まり運動が好きになっていったV児の姿がある。

(2) N児について

保育記録から、N児は人の話を理解することに困難さがみられる幼児であると思われる。そのため運動遊びでも集団ですることに対しては有能感を感じることができなかったのではないかと考えられる。しかし、運動能力は低くなくむしろ高い幼児であるので、友達や先生との受容的な関わりが今後必要である。

まとめ

本研究では、幼児一人一人の育ちを継続的に記録した教師の保育観察記録を手掛かりに、内発的動機づけを高める運動遊びを取り入れた年間の取り組み内容および運動場面の環境の工夫が、幼児の運動有能感を高め、運動能力向上にもつながっていったのかどうか検証を試みた。

その結果、運動有能感と運動能力の向上が見られたことから、運動遊びの人的・物的環境構成、年間計画の取り組み内容が、内発的動機づけを高めることに有効であったことが明確となった。また、保育観察記録からみた4名の幼児の姿と運動有能感や運動能力の変化の関係は、子どもの心の中の見えない自己認知を教師がいかに見取っていくかが重要であることを示唆している。

本研究はS幼稚園の実践内容を客観的に分析したものであるため、教師の毎日の生活の中の具体的な援助を基礎的なデータにしていない。今後は、そのようなデータを含めたさらに多くの幼稚園の実践を継続していきながら、どのような環境構成が幼児の運動有能感の発達に寄与するかを検討することが課題である。

文 献

- Harter,S. and Pike,R.(1984), The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*:55.
- 文部科学省 (2008) 平成20年度告示 幼稚園教育要領・保育所保育指針.
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・筒井清次郎・鈴木康弘・中元浩揮・近藤充夫 (2010) 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力. *体育の科学*60 (1) : 56-66
- 奈良県教育委員会 (2011) 平成22年度幼児の運動能力・生活習慣等調査 : 4-35.
- 岡沢哲子 (1996) 幼稚園の運動遊び場面における有能感テストの作成. *スポーツ教育学研究*. 16(1). 63-72.
- 岡沢哲子 (2005) 幼児の運動遊びでの有能感形成におよぼす保育者の言語活動の影響について. *奈良女子大学大学院人間文化研究科 人間文化研究科年報*20 : 229-243.
- 杉原隆 (2000) 新版幼児の心理学. 建帛社 : 36-54.
- 杉原隆 (2003) 運動指導の心理学. 大修館書店 : 146-148.
- 杉原隆・森司朗・中村和彦ら (2004) 運動遊びが幼児の心理的発達に及ぼす影響. 文部省科学研究補助金研究成果報告書.
- White,R.W. (1959) Motivation Reconsidered : The concept of competence. *Psychological Review*66(5) : 297-333.